

6 3年間の取り組みで得られたこと

(1) 4ステージに分けたプログラムデザイン

全行程を4つのステージに分け、ステージごとのねらい、活動のポイント、スタッフのかかわり方を明確にした。「出会い→仲間づくり→挑戦→旅立ち」を一連の流れとすることで、「やり抜く力」「自信をもって取り組める力」を高めることができた。【図1】

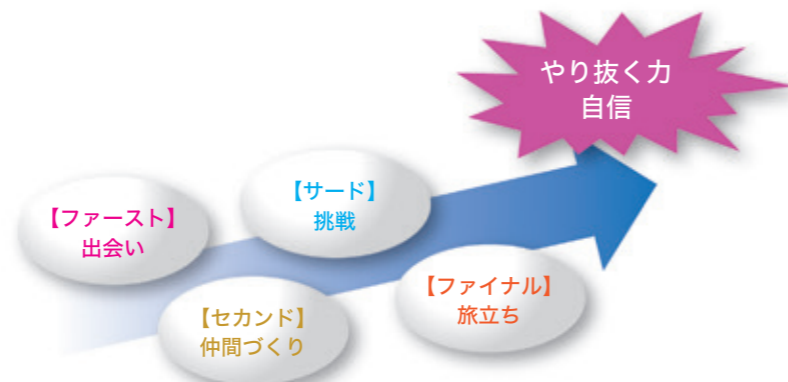


図1. 4ステージ (イメージ図)

(2) ふりかえりの充実

個人の目標が明確になることで、活動・ふりかえり時に、スタッフが個に応じた具体的な支援を行いやすくなり、ふりかえりを次の目標設定につなげることができた。ふりかえりを次日の目標設定に生かすことで、参加者が目的意識を常に強く持ち活動することにつながった。【図2】

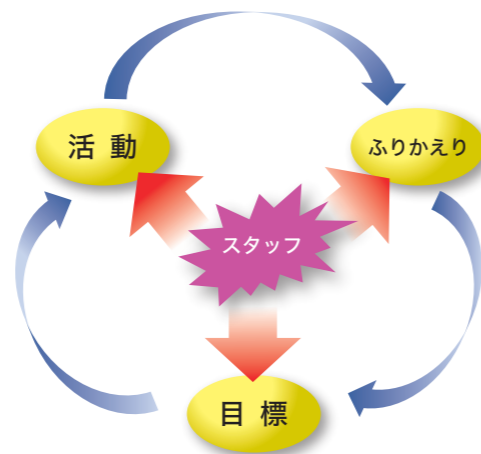


図2. 目標設定→ふりかえり (イメージ図)

(3) 魅力的な登山プログラム

「上毛三山を制覇する」ことを銘打っている限界突破キャンプは、応募者の挑戦意欲を刺激するものであった。3年目の令和3年度は、18名の定員に対し54名もの応募があった。日常生活では味わうことができないチャレンジを求めている子供たちが多くいることが分かった。

また、3年間の参加者のふりかえりをみると、「やり抜く力」の向上が顕著であったことから、登山を中心としたプログラムの強みが明確になった。

おわりに

「限界突破キャンプ」は、実際には4年間かかっていますが、今年度3年間の完結編として企画しました。令和2年度、担当が、公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団の「第19回トムソーヤスクール企画コンテスト」に応募しましたが、審査を受けることなく事業は中止となりました。

令和3年度、事業実施を目指し、担当が再度「第20回記念トムソーヤスクール企画コンテスト」に応募し、3年間の取り組みが評価され、一般部門の最優秀賞「安藤百福賞」を受賞することができました。

豊かな人間性を育む長期自然体験事業を推進するためには、職員だけで企画するのではなく、「推進委員会」を設置し、企画の段階から委員の先生方にご意見を頂くことと県内の様々な機関と連携して実施することが必要です。こうした体制でコツコツ3年間取り組んできたことが、認められたことは本当に嬉しく思います。

また、今年度は新たな試みとして、「学校法人慶応義塾大学医学部眼科・株式会社坪田ラボ・独立行政法人国立赤城青少年交流の家」の三者が共同研究の契約を結びました。

研究の目的は、約1週間の屋外活動前後で屈折値・眼のバイオメトリーデータ・ドライアイ・アレルギー性結膜炎などを評価・比較することです。

1週間の集中的な屋外活動は、参加者の脈絡膜厚と中心角膜厚を増大させ、脈絡膜厚と近視進には強い相関が認められており、「限界突破キャンプ」は近視進行を抑制する効果をもたらす可能性が示唆されました。

このことから、今後の長期自然体験活動の方向性が見えてきたと思います。

今まで、赤城で実施する長期自然体験活動では、「自己肯定感」「やり抜く力」等参加者の子供たちの内面に焦点をあてて、事業を企画してきましたが、今後は長期自然体験活動が直接子供たちの体にどんな影響を与えることができるのかということにも視点を置き、3年計画で取り組んでいきたいと考えます。

令和4年3月 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
協力：群馬テレビ、前橋市立赤城山分校
共同研究：学校法人慶応義塾大学医学部眼科、株式会社坪田ラボ
発行：独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立赤城青少年交流の家

令和3年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	松村 純子
次長	鈴木 昭博
主任企画指導専門職	塩原 基寧
企画指導専門職	渡邊 秀幸/竹内 正則/小林 大輔
企画指導専門職付	反町 峻
主幹兼事業推進係長	福岡 公平
事業推進係員	成清 裕史/小林久瑠美 阿佐美幸子/吉田 賢/高田 真美/松井莉乃羽
総務係長	吉田 真祐
総務係員	鈴木 和子
管理係長	長谷川敦子
管理係主任	朝日麻理奈
管理係員	寺田 里美/佐藤 順彦
学生サポーター	細田 希星